

発行者 群馬県山岳連盟
〒371 群馬県前橋市大手町1-1-1
TEL (0272)23-1111 内線519-520
群馬県観光委員会
編集者 群馬県山岳連盟 編集委員 会
責任者 太田 忠行
印刷所 (有) 高橋 印刷
定価 1部50円



雄名一浜近字題

全日本登山体育大会に参加して



赤石春親 岳連副会長

第16回大会が4月21日、25日迄、秋田県田沢湖の駒ヶ岳を中心に開かれた。駒ヶ岳で此の大会が開かれたのは第8回13回に次いで3回目主管は秋田岳連、参加者は全国から31パーティ、32人との事だった。雪上生活技術を中心に歩行技術やスキー技術の研修に励んだ。開会式は田沢湖青少年スポーツセンターで行われ、特に三笠宮殿下から参加者一同に励しのお言葉があった。

次いで22日早朝から実技行動に入り、スキー隊A隊4班(ワカン隊B隊1班)。各県役員参加者はD隊(2班)に分れてのスキー行動。19日より連日の降雪の中を此の日は、頂上往復後八合目(約3000M)地点に幕営。D隊は登頂後下山の子定だった。D隊も3000M附近で片倉沢を越え尾根に出た付近から猛烈な吹雪を真正面から受けて眉毛も何も真白視界も狭く先者の姿も見えない勝ち、カチカチのアイスバーンをひたすらスキーを押し進める。突然視界が開けると八合目小舎が50M程先きに薄すばんやりと見える。正午過ぎ小舎に入り昼食にして天候待ちに

するが一向に良くならない。CL、SL合議の結果、登頂は見合せて2時出発下山とする。幕営準備に入った選手達の拍手に送られて下山開始。尾根を離れて森林帯に入っからは、快的な滑降が続く、忽ちの内に車の待つ登山口に着いて了った。此の日は気温(-5.5度風速3.3M)との事だった。

翌23日は前日より稍良くなり時々薄日も差す様になった中を乳頭山に向ふ。孫六の湯の裏手の尾根を急登して田代平を経て山頂に向ふ予定だったが、稜線に出る手

前日から昨日に近い天候となり、結局田代平山荘から引返す事を余儀なくされた。下山路は登路をそのま、30cm近い新雪を思ひくく蹴散らしての素晴らしい滑降だった。25日には午前9時からセンターの体育館で閉会式が行われ、式後其々帰路についた。全日程を通じて降雪に見舞われたが、考え様によつては反って実り多い研修が行われたとも云へる。秋田岳連の会長始め多数の人々の心温るもてなしに深く感謝の意を表したい。

登山と責任

常任理事 太田 忠行

今年のゴールデンウィークは雨に始まり雨で終った。山では天候が悪かったし、雪も多かったことなどが原因してか遭難も多く発生した。新聞は連日雨中のニュースと山の遭難記事を報じていた。事故のほとんどが縦走中に稜線からスリップし沢に転落して死亡していることから登山者の技術の未熟も相当にあつたのではないかと思

正当業務行為として違法性がなく犯罪にならないのである。もつとも非常に抽象的ではあるが、社会通念上是認される範囲内のことである。では、登山の場合はどうなのか、より困難を目指しより高度な登山を行えばより危険も大きくなり、登山は常に危険(遭難)と表裏の関係にあるということが言える。社会一般でもこのように大変危険なスポーツであるのに敢えてその中に飛びこんでいく一般の登山者は自分でもその危険は承知しており、これはまさにパーティ全員が危険を互いに負担していることになるではないか。(危険の分担・注意義務の分配) そうだとすれば特異な事例は別として、通常の事故の場合合はリーダーばかりに注意義務を負わせるのは少し酷に過ぎるという

山岳遭難事故が今日まで全く法規制の外におかれていたわけではない。スキー事故やいわゆるシゴキ事件等は別にしても、縦走中や岩登り中の事故で刑事責任を問われたケースが幾つかあつた。しかし、多くの場合リーダーとしての刑事責任を問われたというよりも高校の教師が高校生を引率して登山中に事故を起し、引率責任を問われたと考えられるものばかりであつた。一般山岳団体のリーダーが刑事責任を問われた事故は、昭和三十五年五月二十九日谷川岳マチガ沢で発生した「バンド事件」だけ

この事件は、会社山岳部員三名が四パーティに分れて谷川岳東面で集中登山を行った際、そのパーティのリーダーに選ばれた当時三歳の青年が二〇歳になる女性ほか二名を連れてマチガ沢の沢から谷川岳頂上(向う予定であつた)が途中間の沢に迷ひこみ、足場の不安定な所で持っていたビッケルの先端に古い皮バンドを取つてその女性に差し出し、これを握らせて引き上げようとしたところ、この皮バンドが切れて女性を転落死させたものであつた。パーティ四名の中二名が女性しかもザイルも携行せず、ルートを誤り、皮バンドを垂らして握らせ、たものこれが切断するという特異な事件で当時刑事責任を問われたものである。

「特殊集団における自治の原則も時代の急変を伴う。集団自体の内容的変化と各個々の具体的なケースによつて法の介入を必要とするような場合が生じてくる。現在のが国の登山界はまさにこのような意味でこれまで無縁と思われていた法律が介入するいろいろな契機をほらんでいるのではないかと考えられる。」と。

山岳遭難であつても特異なもの社会生活の秩序を維持する法律が放つておくことはしませんよと

九月 海外登山トレッキング 報告書発行

- ### 岳連の行事予定
- 四月二日 救助隊結団式
 - 五月一日 県内総体
 - 二三日 一般対象救助訓練
 - 二五日 指導員総会
 - 三〇日 春山講習会
 - 六月六日 国体選手選考会
 - 二〇日 岳連総会
 - 二七日 岩登り講習会
 - 七月 四日 救助隊訓練
 - 八月 一日 尾瀬美運動
 - 海外登山トレッキング 報告書発行

三方を山に囲まれわずかに一方を、関東平野に開いた桐生、山業水明とうたわれ、雑物とともにその静かなたずまいは「東の京都」といわれるゆえんである。

最近の宅地造成の盛況には、目を見はるものがありますが、桐生もその例にもれず近辺の緑の山々は、いたる所にむざむざアトを見せている。そんな中であつて桐生の山の盟主 根本山とそれに連なる鳴神山周辺は、県の自然公園の指定を受け自然の保護と整備が着々と行なわれている。

中でも鳴神山はハイキングには手頃の山で、昔から土地の人々にはタケサマと愛称され、その付近の人々の信仰の対象となつていた。そして、毎年五月の第一日曜日に

は山開きの祭典が催され、この頃から一般の登山者の姿が見られ登山のシーズンを迎える。

鳴神山には桐生駅より梅田行のバスに乗る。市街地をすぎると左側鳴神山——吾妻山の支稜上に「きのこ会館」がまるで西洋の城

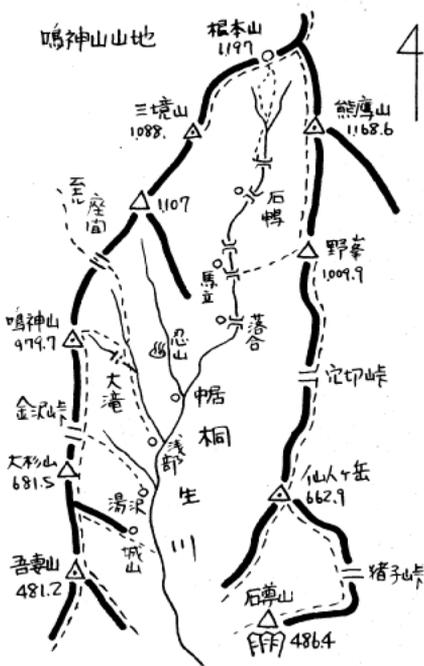


鳴神山への登山口にある大滝

—かくされた山③—

鳴神山とその付近

桐生山岳会



水産食用緑藻類であるカワソリ(高沢海苔)が自生している。一時聞たらずに砂防ダムをすぎるとすぐに鳴神山の登山口である石の鳥居が見えてくる。鳴神山に源をなす小さな沢沿いに杉木立の中産地であり、杉を運び出すソリ道がいたる所のできている。平坦な山道も、丸太を並べたソリ道やソリ橋が変化をあたえてくれる。五分ほどで大滝(約九メートル)の下に出る。滝つぼにはサンショウウオが生息するといわれ地元の中学生により調査がたびたび行なわれている。

大滝は左岸を巻いて上部に抜ける。平行して長大なソリ橋が岩壁におおつかなく危険なため山道を通って上部にた方がよい。再び杉林の中の山道となる。道が沢からはなれ左岸のやや急登を登りつめると、こんどは大きく左に曲

り、沢にもとる。谷が狭ばまり岩の出てきた所が水場となっている。今まで地下にもぐり伏流となつていたがここで再び顔を出す、水場より沢通しに約十五分登ると川内方面からの登山道と合流する。山頂の直下であり二匹のコマ犬と神楽殿が梅田側と川内側に建っている。今はその奥に建てられた新しい神楽殿があり、ちよとした広場となっている。これより山頂までは五分である。大きく見える赤城山、架梁丸、足尾山塊の山波の向うに日光の山々、足下の山あいには開ける桐生と展望は良い。また鳴神山の植物は赤城山よりはるかに標高が低いにもかかわらず高山植物またはこれに準ずる植物が多く、その中でもキソコザクラ(カソコウ)、ヒメイワカガミは特筆すべき植物と考えられている。キソコザクラは、桜草科中では容姿といい、花の美しさとい

桐生山岳会紹介

昭和二十三年に発足し、上越方面を中心に縦走、岩登り、スキーツアーなど幅広い登山活動をしている。主な記録としては冬季谷川岳山初縦走、越後三山縦走、また近年では戸隠ダイレクト尾根、

剣岳北方稜線に足跡を残している。市民登山教室や市民ハイキングなど二八年間の実績は、社会体育振興に貢献している。

会員数一五名、OB会七十名。事務所・桐生市小梅町六の二二 樋口宗平 電話〇二七七(四四) 五三七〇 代表者 赤石春親

コースタイム

鳴神山	桐生バス梅田行	浅部	三六分
大滝	二二三分	鳴神山頂	六〇分
三〇分	室場	バス	五〇分
三〇分	三〇分	桐生	
鳴神山・吾妻山縦走コース			
鳴神山	三九分	金沢沢	四九分
吾妻山頂	一五十分	吾妻公園	三〇分

(文責 吉田勝利) 〇四五三

大型写真パネル・風景・撮影 あなたの山行のネガでパネルにしませんか。

須田フォト光芸

前橋市総社町植野225 - 22
TEL 0272-51-0206

羽毛サマーシュラフ 7,000円以上

山とスキーの店 有限会社 石井

伊勢崎市中央町18番8号
TEL 0270-25-0272

第二回海外登山技術研究会

海外登山研究会主催で、さる三月二六・二七日樺山山岳委山荘に於いて約五〇名の参加者を集め開催されました。

一昨年の赤城山に於いて行なわれた、第一回の「海外登山における諸問題」に引き続き行なわれたもので、今回はさらに一歩進め、遠征計画へのステップとして、テーマを「七〇〇〇米峰の計画と実践」として、それに付随した問題を研究対象としました。

第一日目、浜名岳連会長の挨拶に始まり、七四、七五年の遠征報告(四隊)が行なわれました。この報告の中では、国の内外とわず高く評価されている。カラコルム偵察隊によるチョクトー・ヒアフォ水河の踏査記録はスライドによる報告ですばらしいものがあつた。昼食後、トレッキング報告が二隊行なわれたあと、広島三郎氏の講演「海外登山情勢」では、最近とくに多いカラコルム遠征についての情報等、氏の経験を含めて細部にわたつての講演が行なわれた。

第二日目、過去数多い遠征経験をもち、特にシヤヌーに於いては立派な成果をおさめ、自から登頂者となつた市川章弘氏の講演「シヤヌーでの闘いを氏の撮影による映画をもとに行なわれた。午後、今回のテーマである「七〇〇〇米峰の計画と実践」について、パネルメンバーと参加者との間でデスカッションが行なわれ、つづいてト

レッキングデスカッションさらに、七六年の遠征計画及びトレッキング計画の発表があり二日間の子定を終了しました。海外登山は年々増えつゝあり隊の規模もさまざまになり、一時代前の大規模な遠征は少なくなり、ライトエクス・ペシヨンの遠征が見られる近年、我々にも海外登山が身近なものになつてきた。そういった背景の中でもっとも充実した登山のできるのが七〇〇〇米峰の登山だと思ふ。

そこに今回のテーマをおき、県内における海外登山の意識向上を図る目的で行なわれたがまだまだ地方という地域性もあり、全体の意識は低く決して盛況とはいへなかつた。主催者側としては、こういった場を足掛りとして少しでも前進することを、願ひ回数を重ねていきたいと思ひます。

(文責 宮崎 勉)

岳界通信

新加盟団体の紹介

女子雪水クラブ
所在地 多野郡吉井町長根一四二
六〇一五 阪本明子方 会員数
八名 五一年四月加盟 ミヤマ山岳会 群馬登山会の推せんです。

同会は田中成幸氏の指導のもとでトレーニングをつみ、春の明神初冬の富士、春の利尻などの主な山行があり女子だけの会としてユニークな存在となつてゐる。会報「雪」創刊号が発刊された。

第16回全日本登山体育大会

秋田駒ヶ岳にて開かる
日本山岳協会主催 秋田県山岳連盟主管により、第16回全日本登山体育大会が去る三月二十一日、二十五日にかけて、秋田駒ヶ岳に於て開かれた。

渡辺公平日山協会長ら役員三十数人、選手百余人が参加する盛況であり、本県からは赤石春規氏が出席された。

大隅宏氏 急逝さる

群馬ミヤマ山岳会会長大隅宏氏は、去る一月二八日、心筋梗塞のため、急逝されました。氏はミヤマ山岳会はもとより、県山岳連盟の育成発展に多大な尽力をなされ、また全国高体連登山部副部長や県高体連登山部長として、高校登山の発展に大きく寄与されました。ご冥福を祈ります。

高体連行事から

二月三・四日の両日、尾瀬で、各校顧問を対象に冬山指導者講習会をひらきました。初日の基礎スキー術の訓練のち、四日は、あやめ平までスキーツアーを行ない、シール技術・輪かん技術の習得につとめました。参加者は二六名で、三月末のリーグ講習会の下見をかねたものでした。

三月二六日・二九日、高校生顧問を対象にリーグ講習会をひらきました。参加者は一〇七名。輪かん歩行・雪洞・イグルーの作成などを三泊四日の日程で行ないました。あやめ平下の富士見小屋をあけてもらひ、岳連から石井・田中氏を招き、意義ある講習会となりました。

理事会報告

日時 四月十四日 体協会館
報告事項
一、救助隊同訓練の中止
自衛隊・県警などの参加による救助訓練は、自衛隊内部の移動と重なつたため中止となつた。
二、隊員の身分保障について問題提起がなされた。

会報寄贈御礼

「岡山岳連」六号、七号、八号、九号
「兵庫山岳」一〇四号
「FOMニュース」五六号
「とき木」五二号、五三号

尾瀬の美化運動で考へさせられたこと

昨年「尾瀬」へゴミ拾いに出かけたが、年々ゴミが減少し一時期に比べ確かにきれいになつた。しかし自然保護の原点と言はれる尾瀬は、「尾瀬を守る会」などの人達による地道な努力にも関わらず、ますますの面についてこれから本格的な保護運動が始まるのだと思ふ。

これは何回かの美化運動に参加して感じた事柄について、私達登山者の側から何をなすべきか考へてみたい。

まず驚いたことは、尾瀬の大半をしめる群馬側の所有者が、すべて東京電力のものであり、水源地なので無税であること、尾瀬沼は水門で堰止め、微かな発電増のためトンネルで片品川に流している(「遠征のため五月下旬羽田を出発する。キョトワールの最高峰シックル・ムーンは昭和五〇年一月五日インド陸軍登山隊(隊長タンカー中佐)が初登頂に成功した山で両君の活躍が期待されている。次になんとかしなければと思ふのが、美化の名のもと小さなゴミまで拾い集める努力が続いている一方で、小屋を主体とした周辺の汚れのひどさだ。

救助隊結団式

五一年度遭難救助隊は、先に隊員の選考を終え、四月二日夜体協会館において、県警察本部外勤課横山課長補佐、県観光課吉田係長を迎えて結団式を行った。

席上赤石副会長から救助隊員ではあるが遭難防止活動にも力を注いでもらひたい、隊員には僅かなスポーツ保険がかけられているだけで何ら身分保障はないが、今早急にこれを増額する方策も見当らず従つて登山技術の進歩に伴ひ救助活動も必然的に危険が増大している。先ず自己の技術の練磨でカバーしていただきたい旨あいさつがあり、隊員の紹介などをして式は終了した。

大間々山岳会員二名がシックル・ムーンへ遠征

大間々山岳会員坂口喜久雄(二六歳)阿部信幾(二七歳)の両君は自然同人のメンバーとしてインのシックル・ムーン(六五四M)へ遠征のため五月下旬羽田を出発する。キョトワールの最高峰シックル・ムーンは昭和五〇年一月五日インド陸軍登山隊(隊長タンカー中佐)が初登頂に成功した山で両君の活躍が期待されている。次になんとかしなければと思ふのが、美化の名のもと小さなゴミまで拾い集める努力が続いている一方で、小屋を主体とした周辺の汚れのひどさだ。



(文責 川辺柳一)